



平成28年度
第11回 大垣市中学生
ドイツ・シュツットガルト市研修派遣団



平成28年度フレンドリーシティ交流事業

第11回大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣事業

団員名簿(学年、五十音順)

派遣期間:平成28年7月26日(火)～8月2日(火)

No.	役名	氏 名	性別	学校名 役職名 もしくは 学年
1	団長	やまもと まなぶ 山本 学	男	東中学校 校長
2	総務兼通訳	こくぼ ひろか 小窪 裕香	女	東中学校 教諭
3	総務	よしやす みえ 吉安 三恵	女	(公財)大垣国際交流協会 職員
4	団員	えなみ みつき 榎並 美月	女	東中学校 1年
5	団員	かわはら さとか 河原 智華	女	西部中学校 1年
6	団員	いとう はるき 伊藤 大記	男	星和中学校 2年
7	団員	かわむら あやの 河村 綾乃	女	東中学校 2年
8	団員	たかぎ りお 高木 里桜	女	江並中学校 2年
9	団員	ながい かのん 永井 かのん	女	北中学校 2年
10	団員	なかむら いぶき 中村 伊吹	男	興文中学校 2年
11	団員	たなはし みゆう 棚橋 美友	女	星和中学校 3年

第11回 大垣市中学生ドイツ・シュツットガルト市研修派遣団 日程表

派遣期間：平成28年7月26日（火）～8月2日（火）の8日間
派遣人数：11人（引率者3人（団長1人、総務2人）、中学生8人）

	月 日	現地時間	交通機関	日 程
1	7月26日（火）	5:45 6:00 7:30 9:45 15:00 17:50 18:30 19:00	バス ルフトハンザ航空 （LH737） ルフトハンザ航空 （LH134）	スイトピアセンター文化会館ロータリー集合 大垣市発、中部国際空港へ 中部国際空港着 中部国際空港発（フランクフルト空港行き、LH737） フランクフルト空港着 フランクフルト空港発（シュツットガルト空港行き、LH134） シュツットガルト空港着（担当者の出迎え） ケーニギン・シャルロッテ高校へ移動 ホストファミリーとの対面式、その後各家庭へ 【ホームステイ①】
2	7月27日 （水）	8:45 8:45-10:15 10:33 11:00-11:30 12:45-15:30 15:30 16:00-17:00 17:35	電車	《シュツットガルト市》（ドイツ学生同行） ケーニギン・シャルロッテ高校訪問集合 学校訪問（学生交流、ゲームなど） 市役所に向け出発 表敬訪問（シュツットガルト市役所にて） 市内見学（マーケット、広場、旧宮殿など） ダイムラーベンツ博物館に向け出発 ダイムラーベンツ博物館 ホストファミリー宅へ 【ホームステイ②】
3	7月28日 （木）	8:00 19:00	バス	《シュツットガルト市》（ドイツ学生同行） ケーニギン・シャルロッテ高校訪問集合 ノイシュバンシュタイン城 ウルム大聖堂へ ホストファミリー宅へ 【ホームステイ③】
4	7月29日 （金）	8:25 8:33 9:00-12:15 12:39 14:30-16:00 17:04 19:00-20:30 20:30	電車、市バス	《シュツットガルト市》（ドイツ学生同行） メーリンゲン駅集合 ヴィルヘルマ動物園へ向け出発 ヴィルヘルマ動物園見学 リッタースポーツチョコレート工場へ向け出発 チョコレート工場見学、チョコレート作り メーリンゲン駅到着 ホストファミリーとの懇親会 ホストファミリー宅へ 【ホームステイ④】
5	7月30日 （土）			《シュツットガルト市》 各ホストファミリーと1日過ごす 【ホームステイ⑤】
6	7月31日 （日）	8:30 13:00 16:15 16:30	バス	シュツットガルト空港集合 シュツットガルト発 フランクフルト着 フランクフルト市内ホテル着 【ホテル泊（フランクフルト）】
7	8月1日 （月）	10:00 13:40	ルフトハンザ航空 （LH736）	ホテル発 フランクフルト空港発（中部国際空港行き、LH736） 【機内泊】
8	8月2日 （火）	8:05 11:00	バス	中部国際空港着 スイトピアセンター文化会館ロータリー到着・解散

遠い国から近くの国へ

大垣市立東中学校 校長 山本 学

中部国際空港を飛び立って12時間のフライトを終え、夕方のドイツに到着しました。夕方といっても陽はまだ高く、日本では午後2時くらいの感じでした。なんて遠い国なのだろう。時差もあり、早く横になって眠りたいと思っていました。フランクフルト空港でシュツットガルト行きに乗り換え、30分後にようやく目的地に到着しました。空港では、ホストファミリーが疲れていた私たちを明るく迎えてくれ、ホストファミリーの笑顔にほっとした気持ちになると同時に、初対面の相手への緊張感が私を含め、団員の表情に出ていました。

私がお世話になった、クラウディアさんは、ご主人とともに日本での生活経験があり、いつもホームステイを引き受けてくださる方で、交流事業の中心的存在でした。つたないドイツ語と英語を駆使して話す私に気を遣い、日本語で話してくださるのに甘えさせていただきました。庭でのバーベキューに舌鼓を打ち、長い初日の陽が沈んだのは、ドイツ時間の午後10時過ぎでした。



2日目、訪問先であるケーニギン・シャルロッテ高校では、終業式が行われていました。日本と異なり、参加は自由で、生徒たちが歌やダンスなどを披露し、学校が関与するのは優秀生徒の表彰だけでした。終業式というよりも生徒主催のイベントのようでした。日本を出発する前日に、ドイツで自爆事件が発生して、テロが心配でした。結局その事件は、移民問題が原因となっていたようでした。移民問題はEUの大きな課題となっていました。学校にも多くの民族が入り混じっているのが一目でわかりました。しかし、差別的な雰囲気は何も感じられず、1年の締めくくりと夏休みに入る前の喜びで会場は満ちあふれていました。

その後、市役所の表敬訪問で親書を手渡し、交流の最初の目的を果たした気がしました。市役所付近は中心地であり、団員たちは、ホストフレンドと一緒に街の散策で、コミュニケーションがとれていくのがわかりました。

ベンツ博物館、ノイシュヴァンシュタイン城、ウルム大聖堂、リッタースポーツチョコレート工場、多くの見学地域を回ると、ドイツの歴史や国民性に共感を覚える自分がいました。なによりもホストファミリーと一緒に食事をするときの会話は、一番の楽しみになりました。日本に住んでいた時の思い出、夏休みの過ごし方の違いや家族の話など、日常的な会話は国の違いを感じさせない時間でした。



遠い国の人々が最も近くに感じられたひとときを過ごすことができました。最終日のホストファミリーと過ごす1日は、ハイキングでした。一般的なドイツの家族は、週末は森へ出かけ、森の中で過ごすのだそうです。森を進むとその先には、滝があり多くの家族連れが滝を囲んでいました。滝から舞い降りる水しぶきと風が全身を包み込み、旅の疲れを癒やしてくれるとともに、旅の終わりの名残惜しさを感じました。最後は、団員誰もが涙顔でのホストファミリーとのお別れでした。その姿がこの交流のすべてを物語っていました。遠かった国ドイツが近い国と誰もが感じた8日間でした。

最後に、交流事業の中心となってお世話をいただいた、クラウディア・ベックダイムさんとケーニギン・シャルロッテ高校の先生方、貴重な体験の機会を与えてくださった国際交流協会の皆様や関係者に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

ドイツの文化に触れて

大垣市立東中学校 教諭 小窪 裕香

私は今回の研修を終えて、総務兼通訳としてドイツ・シュツットガルト市への派遣の機会をいただき、大垣国際交流協会の皆様、団長の山本学校長先生に本当に感謝しています。外国へ行き、外国の方々とコミュニケーションを図ったり、文化に触れたりすることに興味があったので、ドイツへの派遣を相談されたとき、すぐに引き受けることを決めました。自分の役割を果たすと共に、できる限り多くの人と交流し、ドイツについて学ぼうと意気込んで臨みました。

特に嬉しかったことは、今回の研修を通して子どもたちが成長した姿を目の当たりにできたことです。最初の事前研修で、「自分から話しかけたり、人の輪の中に入っていったりするのが苦手で積極的な自分になりたい」と目標を語った生徒がいました。自分の弱さと向き合い、今回の体験を成長する機会にしようとする前向きな姿勢



に感心し、強く心に残りました。しかし、最初のケーニギンシャルロッテ高校見学では、ドイツの学生とゲームをして親しくなった後にも関わらず、その子は日本の学生と固まって行動していました。「今回の研修で自分を成長させるには自分から動かないと。」と私もその子を何度も励ましました。今のままではいけないと自分でも感じていたようで、少しずつ自分からホストシスターに話しかけ、一緒に行動する姿が見られるようになりました。過去にその子の家にホームステイを受け入れた子がその子に会いに来た日は、久しぶりの再会で少し戸惑った部分もあったと思うけれど、笑顔で会話することができていました。知らない土地、そして十分に意思疎通が図れない中、勇気を振り絞り自分の弱さを乗り越えられたことにその子の意志の強さを感じました。また、懇親会で日本文化を発表する直前にハプニングが起こったため急に合唱でソロを頼まれたけれど、堂々と歌い切った生徒もいました。自分に自信がないから目立つことはしたくないと言っていたのに、お世話



になったホストファミリーやシャルロッテ高校の先生や学生に日本のよさを伝えたいという思いが上回ったのだと思います。他にも思い切って自分をさらけ出すことで友達との距離を縮められるようになった生徒もいました。そんな姿を見て、私も1人で外国へ行って初めてホームステイをしたとき、色々な国の人と英語を使って親しくなれたことで自信がついたことを思い出しました。言葉も文化も違う人と仲を深めて

いくことは、自分の思いを伝えながら相手の思いを理解していかなければならないため、自己を見つめ直し、他者を受け入れようとする姿勢へとつながっていくのだと感じました。

また、リアルな場面での言語のやりとりは自然と身に付くということを英語教師として再確認させられました。私はより多くの人と交流するために、簡単な挨拶ぐらいはドイツ語で話せるようにしようと思って少し勉強してから行きました。でも、いざ使おうとすると何度も暗記したのに言葉が出てこなくてもどかしい気持ちでいっぱいでした。そこで、英語で「『またね』ってドイツ語でなんて言うんだ



った。」と聞いて “Bis bald.” と教えてもらった瞬間、暗記していた音や文字がリアルな場面でその言葉を発する必要性にかられたことによって、すぐに使えるようになりました。最初の挨拶や別れの挨拶だけでも相手の国の言葉で言えるようにしておく、相手を理解しようとしている姿勢が伝わり、笑顔で出会え、別れられるので気持ちがいいと思いました。今回、再確認したことで、英語の教科書に出てくる基本文や本文を生徒にただ丸暗記にさせるのではなく、使用場面を想起しながら発話させたり、必要性を感じながら表現を使わせたりできる英語の授業をつくっていこうと改めて思いました。

このドイツ研修を通して、国際理解や外国語を学ぶことについて自分の考え方を深めることができました。私はホストファミリーと3日間しか一緒に過ごすことができなかったけれど、別れるときは自然と涙があふれました。生徒による日本文化紹介で、「一期一会」という四字熟語を毛筆で書き、意味を英語で紹介した生徒がいましたが、まさにその通りだと思いました。今回のドイツでの体験をこの研修に参加していない生徒にも伝え、広めていきたいと思います。



研修を通して

公益財団法人大垣国際交流協会 吉安 三恵

このドイツ・シュツットガルト市研修派遣事業を終えた今、2つのことが特に印象に残っています。1つ目は、団員の成長です。全員で決めた目標には、この研修を通して積極的に交流し自分自身を成長させたい、という思いを含めましたが、ドイツへ行くまでの事前研修では、団員の積極的な姿を見ることができず、ドイツの人と交流ができるのだろうか？と少し不安を持ちながらの出発でした。1日目、ホストファミリーとの対面では、長旅の疲れと初めて会うホストファミリーを前に緊張した様子でした。ホストファミリーと一緒に各家庭へ行く団員を、「がんばれ！」と心の中で応援しながら見送りました。4日目の夜に開催された懇親会では、家族の様に接して下さったホストファミリーの皆さんのおかげで、団員たちは自然と笑みがこぼれ、すっかり家族になじんでいました。とても嬉しく思った瞬間でした。そして、その懇親会では、ホストファミリーへの感謝の気持ちを込め、日本文化を紹介しました。出発前の練習では、声が小さかった合唱も、伴奏のCDが使えないという急なハプニングの中堂々と歌い、また書道や折り紙なども立派に紹介することができました。盛大な拍手をもらい、ほっとした様子の団員を見て、心から感動しました。最初は恥ずかしい思いがあった団員も、ホストファミリーが真剣に見て、聞いてくれている姿に、そして今までの感謝の気持ちに対して、精一杯の思いをぶつけた結果だと思いますし、自分の殻を破って成長したのだと思いました。そして、言葉でのコミュニケーションは十分でなくても、相手に向き合い、相手を理解しようとする思いが大切だということを、団員たちの姿を見て再認識しました。



2つ目は、人とのつながりです。隔年で実施しているドイツ・シュツットガルト市からの学生訪問団の受入を担当していることもあり、昨年、また3年前に大垣に来たシュツットガルト市の学生数名が会いに来てくれました。また、今回ホームステイをさせていただいた家庭は、奥さんが昨年、息子さんが3年前の大垣訪問メンバーで、再会ができることを心待ちにしていました。この時期のドイツは、21時過ぎまで明るく、毎日のように夕食後は外のテラスでおしゃべりを楽しみ、またゲームをしながらドイツ語を教えてもらい、気がつけば毎日のように23時頃まで楽しいひと時を過ごしました。仕事が終わればすぐに家に帰り、家族で過ごす時間を大切にしていると感じました。

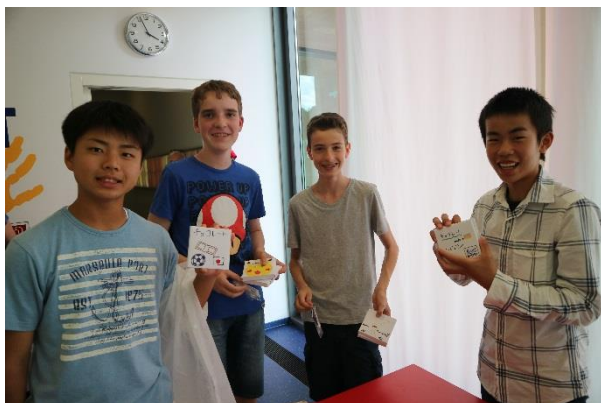


また、一緒に生活する中で、ドイツの文化、大切にしていること、物の考え方、時間の使い方など本当はたくさんのことを知り、感じるすることができました。学生との再会、そしてホストファミリーとの再会は、本当に嬉しいものでした。最終日は、全員が涙、涙のお別れでしたが、それはホストファミリーと充実した日々を過ごし、ホストファミリーが第2の家族になった証だと思いました。団員たちが、お別れのときに誓った「いつの日か再会しましょう！」を胸に、距離は遠いけれども心は近い国になったドイツの家族とこれからもつながりを持ってくれることを願っていますし、私もこの研修を通してつながった人々との関係を大切にしていきたいと思います。

最後に、いつも私たちを笑顔で温かく迎えて下さったドイツの皆さんに、心から感謝しています。ありがとうございました。



ドイツの思い出



ケーニギン・シャルロッテ高校訪問

～学校見学・交流～

大垣市立興文中学校 2年 中村 伊吹

研修2日目は、ケーニギン・シャルロッテ高校に訪問しました。

まず、学校に到着するやいなや驚いたことは、敷地が広いことと校舎などの建物がカラフルだったことです。日本では、学校というのだいたい同じような建て方や色使いですが、ドイツの学校はそのことから学校ごとに特色があるのだろうなど感じるほどでした。



学校の中に入ると、初めにドイツの学生の皆さんと仲良くなるためのゲームをしました。1つ目のゲームは自己紹介ゲームで、名前を言ってボールを投げ、名前を呼ばれた人がボールをキャッチするというものです。このゲームを通して、お互いの名前と顔を覚えることができました。2つ目のゲームは、日本でもよく行うフルーツバスケットでした。Bione（ぶどう）、Banana（バナナ）、Apfel（りんご）、Erdbeere（いちご）の4種類のフルーツでグループを分けて行いました。ドイツ語が難しく間違えましたが、とても楽しくできました。

これらのゲームを行うことで、ドイツの学生の皆さんとぐっと距離を縮めることができました。

続いて学校内を見学しました。コンピュータ室、地理室、図書室、中庭、美術室、理科室、音楽室、体育室という順に回り、最後に終業式を見学しました。特に印象に残っているのは理科室の設備と終業式の雰囲気です。理科室は、実験に使う器具セットが机の上方にあり、ボタンを押すと机の上に下りてきて実験ができるようになるという最新式のものです。他にもボタンやレバーがたくさん付いており、操作がとても難しそうでした。



日本とは違い、とても自由な雰囲気でした。席があるわけではなく、学生はそれぞれ好きな場所に参加していました。始まる前に音楽を流して会場を盛り上げることや成績優秀の学生が校長先生から賞状を受け取り、握手してもらうことなどは、日本にないことで、とても興味深かったです。

僕がうらやましいと思ったことは、スポーツができる施設がたくさんあったところです。ビーチバレーコートやサッカーコートなどがたくさんありました。思わず遊びたくなりました。

その他、自分の持ち物をしまっているところや校舎内は専用スリッパでなく各自の下足であること、指定のカバンがないことなども日本の学校と違いました。

ドイツの学校を日本の学校と比べながら見学することができましたが、それぞれの良さがあり、大切にしているところに違いがあると感じました。また、日本にしかない活動があることも知りましたが、それゆえに今まで以上に真剣に取り組んでいきたいとも思いました。



市内見学

大垣市立北中学校 2 年 永井 かのん



シュツットガルトという都市名は、世界的なサッカークラブで耳にしたことがある人が多いかもしれませんが、シュバーベンのリートルフ公爵が雌馬を育てたことから、Stutengarten (stuten=雌馬の, garten=庭) という名前になったそうです。

市内見学では、旧宮殿や新宮殿などの立派な建物がありました。初めてみる景色は、絵画のような風景でわくわくしました。

宮殿の近くの広場の芝生で、みんなが心地よさそうに寝転がってくつろいでいました。公園には立派な噴水があり、勢いよく水が溢れています。ドイツといえばビール！というイメージがありましたが、実はワインも有名な国だということを知りました。

シュツットガルトでもワインは有名で、たくさん生産しているそうです。昔、たくさんワインがありすぎるために、ある公爵家では、噴水の水のかわりにワインをふきださせました。

また、お酒を造るのを禁止しました。しかし、それも意味がないほど、たくさんのワインが残っていたので、建物を造る際にも、水の代わりにワインを使ったそうです。理由はわからないけれど、その建物はとても丈夫だったようで、今もその頃の建物がたくさん残っています。チョコレートの生産も盛んで、有名なチョコレート工場があります。ベント博物館や、見どころいっぱい都市です。学校やスポーツを通して、大垣市と関係を深めています。



私たちがドイツに来て2日目、シュツットガルトの市役所にて、表敬訪問がありました。噂に聞いていた、ドアのない観覧車のような、飛び乗るエレベーターがありました。私たちはそのエレベーターに、ホストフレンドと一緒に乗りました。乗ろうとする間にも動くので、ハラハラしました。でも、とても面白かったです。

市長さんたちのお話を聞いたり、DVDを見て、違う国籍の人や、違う言語の人がたくさんいて、近代的でありながら、自然や建物がきれいな街だと感じました。市役所はとても立派でした。



新しい建物の中に、古い建物があり、石畳の道路が多くありました。

歴史を感じる「The ヨーロッパ」というような、中世の雰囲気だよう、きれいな街並みでした。ドイツでは「まち」ごとに、小さな水力発電をされていて、北のほうでは風が強いので風力発電が盛んです。ソーラーパネルも多く、20年後くらいまでには原子力発電をなくす予定であることを知りました。環境問題に積極的に取り組んでいて、日本も見習うべきであると思いました。

その後は自由行動で、ホストフレンドたちと市内を回り、アイスクリームや飲み物を買ってもらいました。また、お店を回り、日本では見慣れない果物や、おいしそうなマカロンやタルト、ソーセージなどの食べ物を見ました。ドイツと日本の違いや、フレンドリーシティの魅力を知ることができた市内見学・表敬訪問でした。

自動車の国ドイツ

大垣市立江並中学校 2年 高木 里桜

ドイツに来て驚いた事は、ベンツがたくさん走っていることです。タクシーやバスまでベンツでした。やっぱりドイツは自動車の国だと思いました。そんなドイツのシュツットガルトに、メルセデス・ベンツ博物館があります。建物はとても大きく、設計もとてもおしゃれでした。私たちは、カウンターでオーディオガイドをもらいそのガイドに沿って見学をしました。まずエレベーターに乗って一気に8階へ行きました。そのエレベーターも普通のものとは違い、壁についている



ような感じで、降りるところが8階しかありませんでした。博物館のつくりは8階から下に行くにつれ現代の車になっていくつくりで、時間を旅しているような気分でした。さあ、魔法のエレベーターに乗って1886年にタイムスリップです。

8階には、馬車のようなものがあり、まだまだ今のような車ではありませんでした。しかし、エンジンの付いている馬車でした。これが自動車の始まりだと思うと、これからどうなるのかとてもわくわくします。

7階では、馬車のようなではなくなってきました。しかし、屋根がなかったり、窓ガラスがなかったり、今走っている車とは違うところがありました。でも、ベンツマークがついているものがありました。ブランドの誕生です。

6階は、ディーゼルとスーパーチャージについてでした。また、商用車も展示してありました。だんだん今の車ようになってきました。

5階は、フォルム進化についてでした。8階と比べると、形も多様になってきて、色もカラフルになりました。緊急自動車の展示もしてあり、とてもデザインがおしゃれでした。

4階は安全性を考えた現代のものに近い車でした。また、著名人のギャラリーもあり、ローマ法王の車や、ダイアナ妃の愛車も展示してありとてもきれいでした。



3階は現代の車の型となり、街中で走っている車の展示になりました。

2階は私の一番好きな階です。レーシングカーの展示がしてあります。本当には走っていないけれど、レーシング場のようになっていて展示方法に驚きました。本当に使用されたものでとてもかっこよかったです。

展示してある車は、古いものでもピカピカでドイツの方々の車に対する愛情が感じられました。車の一つ一つがアート作品のようで、日本の博物館との違いもたくさんありました。私はあまり車に詳しくなかったけど、このベンツ博物館は、自分が体験できる所があったり、建物のつくりも面白く近未来的で、とても楽しかったです。また、2006年にできた博物館なので、私たちが行ったとき10周年でした。記念のストラップをもらうことが出来ました。

もう一度行きたくなるような、魅力のたくさんある博物館でした。

「白鳥城」の美しさ

大垣市立東中学校 1 年 榎並 美月

私たちは、3 日目の 7 月 28 日、「白鳥城」とも呼ばれる城、ノイシュヴァンシュタイン城に行きました。この城は有名なので、日本でも、写真を何度か見たことがありました。

しかし、自分の目で実際に見たとき、写真からは伝わってこなかった城の美しさと迫力に、言葉を失いました。

昼食は、城を見ながらソーセージなど、ドイツを感じられるものを食べました。外で食べたので、日本なら暑くなりますが、ドイツは乾燥していて 1 日を通して涼しかったので、昼食を食べている時も、ノイシュヴァンシュタイン城に着いてからも汗をほとんどかきませんでした。



ノイシュヴァンシュタイン城に行くため、坂を上っている途中、馬車を何台も見ました。本物の馬車を見たのは初めてだったので、日本とは全く違う雰囲気になくわくしました。

城に着き、オレンジ色の入り口から壁の内側に入ると、外から見ることでできない景色に感動しました。



ノイシュヴァンシュタイン城は、19 世紀、バイエルン王ルートヴィッヒ 2 世によって建築されました。ドイツ語で「Schloss Neuschwanstein」といい、王が感銘を受けた「マルクトブルク城」という城を手本に造られました。「ノイシュヴァンシュタイン城」という名は、現在「ホーエンシュヴァンガウ城」のある地にかつてあった、「シュヴァンシュタイン城」にちなみ、1890 年になっ

て付けられた名です。建設当時は、「ノイホーエンシュヴァンガウ城」という名で呼ばれていました。

また、この城を建築させたルートヴィッヒ 2 世は、1886 年に謎の死をとげています。そういった過去が、この城の独特な雰囲気と迫力を創りだしているのだと感じました。

私は、ノイシュヴァンシュタイン城が「白鳥城」と呼ばれているのは、ただ城が白いからだと思っていました。しかし、城の中に入ってみると、寝室の洗面台や居間の天井など、王にとって身近な場所に、何羽もの白鳥が描かれたり、彫られたりしていることに気が付きました。

また、執務室に自分が王であるバイエルンの紋章が多くあることや、広間に宴会や客の為ではなく、自分のために何百本ものろうそくを使ったシャンデリアをつけたこと、王室には暖房や水道など、当時では近代的だったものを積極的に取り入れていることから、ルートヴィッヒ 2 世は、自分の偉大さと権力をみせていたことが分かります。

このように、ノイシュヴァンシュタイン城には、「長い」の一言では言い表せないような、深く、謎めいた歴史がありました。

そんなノイシュヴァンシュタイン城は、とても魅力的でしたが、城だけでなく、その途中を通りかかった店や、山のふもとにある、私たちが昼食を食べた場所も、城に負けないくらいの活気にあふれ、見どころがたくさんありました。



ヴィルヘルマ動物園に行って

大垣市立星和中学校 3 年 棚橋 美友

ドイツ・シュツットガルト市研修派遣の 4 日目の午前、私たちはシュツットガルト市にあるヴィルヘルマ動物園に行きました。私は日本でも動物園に 1 度も行ったことがありませんでした。ヴィルヘルマ動物園が初めてだったので、行く前からとても楽しみにしていました。

ヴィルヘルマ動物園は、ヨーロッパで唯一大型の動物園と植物園が一緒になっている複合施設です。ヴィルヘルマ動物園の中にある建物は 1846 年に建てられました。でもこの時は動物園として建てられたのではなく、当時のドイツ皇帝・第 7 代プロセイン王であるヴィルヘルム 1 世のための夏の離宮として建てられたそうです。動植物園として開園したのは 1951 年です。入



ってみると昔、王の離宮だったことを感じさせる建物や噴水・池がありました。広さは 30 ヘクタールもあります。飼育数は約 1150 種 9000 頭です。飼育されている動物の数では、世界で 2 位の多さだそうです。動物園の中には、昆虫類を飼育している昆虫館や水族館もありました。

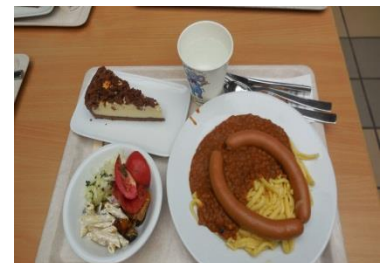
ヴィルヘルマ動物園には、ニホンザルなどたくさんの種類のサルがいました。そのサルたちは、



親がいなかったり、親から虐待・育児放棄を受けていたりしたサルたちで世界中から保護されヴィルヘルマ動物園で飼育されています。鳥が飼育されているところでは、放し飼いで飼育されています。檻や柵の中で飼育されているより間近で見ることができるのでとても迫力がありました。トラが飼育されているところに行くと、ちょうど外から寝床に戻ってくるところでした。とても近くで見ることができました。トラはドイツに来

る前から 1 度見てみたいと思っていたので、嬉しかったです。ホストフレンドの子たちも「ラッキーだったね」と言っていました。動物たちと触れ合えるところもありました。そこではヤギと触れ合いました。思っていたより大きくて最初は少し怖かったけど、慣れてくるとヤギの方も寄ってきてくれて、なかなか出来ない体験ができたと思います。

園内はみんな自分のホストフレンドの子と見学しました。自由時間が終わってからお土産屋さんに行きました。そこには、ヴィルヘルマ動物園では飼育されていない動物のぬいぐるみやグッズが置いてありました。園内には、何ヶ所かヴィルヘルマ動物園の記念コインが作れる機械もありました。日本にあるものと少し仕組みが違って面白いと思いました。



買い物をした後、園内のレストランで昼食をとりました。量が多くて全部は食べきれませんでした。でも、ドイツのソーセージはやっぱり美味しかったです。

ヴィルヘルマ動物園の規模・迫力は日本では体験出来ないのも、本当に楽しくて貴重な体験になりました。

深め合う

～リッタースポーツ・チョコレート～

大垣市立東中学校 2 年 河村 綾乃

4 日目に私たちは、リッタースポーツチョコレート工場に行きました。見学や買い物、チョコレート作り体験をしました。ドイツのヴァルデンブーフ（Waldenbuch）にある、有名なチョコレート工場で、今は世界約 80 ヶ国で販売されているほど、たくさんの人々から愛されています。

買い物では、日本では高い値段でしか売っていないチョコレートが直売店では、日本で売っている値段の約 4 分の 1 の値段で売っていたので、私たちはたくさんのチョコレートを買いました。チョコレートにはたくさんの種類があり、味は常時出ているもの 20 種類、期間限定で販売されているものが季節ごとに数種類あります。種類が豊富で、どれもとても美味しそうなものばかりでした。

また、1 パックに 100 枚入っているもの、透明の袋にいろんな種類のチョコレートがいくつも入ったお得なものなど、味だけでなく種類も豊富でした。

買い物をした後、チョコレート作り体験をしました。まず、チョコレート作りの前に説明を聞きました。チョコレートがカカオからできて主にアフリカ、南アメリカ、南アジアでとれることや、

カカオの中に豆が 25～50 個入っていて、豆は外で太陽の光で乾燥させて作っていることを教えていただきました。他にも、チョコレートができるまでどんなことをしているのかなど、私たちが知らなかったことを教えていただきました。

説明が終わった後、調理室に移動して、チョコレート作りを始めました。チョコレートの種類は 3 種類あって、ミルク・ビター・ホワイトの中から自分の好きな味を選び、トッピングを

しました。トッピングはシリアルやドライフルーツ、コンフレク、マーブルチョコレートみたいなものなど 10 種類くらいの中から 1～3 種類好きなものを選びました。温かいチョコレートを固まらないように、スプーンを使って型に入れ、型を板に軽く叩くようにして、空気を抜く作業がとても大変でした。固まるのを待つ間に、チョコレートを入れる箱に自由に絵を描いたり、字を書いたりしました。ドイツの国旗を間違えて描く人が何人かいて、ベルギーの国旗になったりして、楽しく作ることができました。完成したチョコレートは、自分一人で食べるだけでなく、友達と交換したりして、いろんな味を味わうなどしました。

オリジナルチョコレートを作ったことにより、みんなで教え合ったり、チョコレートを交換して会話が aumentari、いろんな味を楽しむことができました。

なかなかできない、貴重な体験ができて良かったと思います。



練習の成果

大垣市立星和中学校 2 年 伊藤 大記

懇親会では、短い練習時間だけで成功できるか不安でしたが、それぞれが「がんばるぞ」という、強い思いで臨み、練習の成果を出し切れました。そして、日本の素晴らしさを精一杯伝えることができたのでドイツの方々に少しでも興味を持って頂けたと思います。

はじめは、全員で「翼をください」の合唱をしました。僕は男子パートで 2 人だけだったので、他と比べて声量が少なく、練習では声が足りないことが課題でした。しかし、本番ではしっかり声を出し、たくさん拍手が貰えたので、ほっとしました。1 番が終わったあと、2 番を歌う予定でしたが、拍手をたくさんもらえたので、止まってしまいましたが再開して最後まで歌いきれたので良かったです。



次は、永井さんの浴衣の着付けで日本らしい浴衣の着方を見て喜んでもらえました。河村さんと高木さんのリコーダーはドイツの民謡である「かっこう」を発表しました。棚橋さんの茶道の紹介では、その場で実際に抹茶を立てるところを見てもらい、抹茶を提供できたので良かったです。

次は、僕と榎並さんの折り紙です。手裏剣を折って見せました。日本での練習の時は時間がかかりすぎてしまったけど、折り目をつけるなど、工夫をして、練



習を重ねる度にだんだんスムーズに行えるようになりました。そして、本番では手裏剣の発表をする際に、NARUTO の画像を見せるとみんなが反応してくれて準備をした甲斐がありました。

僕の発表が終わったあと、全員に折り鶴を配るとき、子供も大人も喜んでくれ 1 人 1 人から「ありがとう」と声をかけられて「がんばって折って良かったな」と思いました。

最後に、河原さんと中村くんの書道です。何度も練習を重ね、試行錯誤して素早く行えるようになりました。日本らしい書道で盛り上げてうまく締めくくることができました。

今回の発表を通して、すべて予定通りにうまくいってみんなに喜んで頂けたので大成功と言える懇親会になったと思います。

紹介が終わったあと、ホストファザーに「あなたの発表は素晴らしかったです。」と褒められて練習の成果とやりがいを感じました。



フランクフルトの街

大垣市立西部中学校 1 年 河原 智華



私達は、国内線・国際線の乗り換え経由地として、往路復路ともフランクフルト空港を利用しました。フランクフルト空港は、ドイツ最大規模の国際空港で、利用者も多く、にぎわっていました。

ホストファミリーとお別れをした後、シュツットガルト空港からフランクフルト空港へ向かう飛行機に乗り込む予定でしたが、飛行機に搭乗し、離陸を待っているとき、「フランクフルト空港でオーバーランが発生し、当面空港が使えなくなった」というアナウンスが流れ、急遽、バスでフランクフルトに向かうことになってしまいました。

バスでの移動は飛行機に比べて長くなるため、予定していたフランクフルト見学が中止になってしまいました。私は密かに楽しみにしていたので、とても残念でした。

フランクフルトで宿泊したホテルの近くには、スーパーマーケットがありました。もちろん、ドイツの観光名所となっている有名な建物も素晴らしいとは思いますが、私は、ドイツ人が普段利用するような建物や施設にとっても興味を持っています。スーパーマーケットのシステムは、日本と似ていましたが、日本の同規模の店舗に比べると、お客さんが少ないように感じました。私が日本で母と共に訪れるスーパーマーケットでは、いつもレジが混雑していますし、母は週に何度もスーパーで買い物をしています。しかし、私のホストファミリーは、頻繁にスーパーを訪れることはなく、まとめ買いをしているようでした。この点が日本とは少し違うように感じました。

朝、フランクフルト空港にバスで向かうときに、運転手さんとガイドさんが街の周辺を案内してくださいました。

フランクフルトは、国際金融・商業の中心であり、たくさん的高層ビルが集まっています。また、欧州中央銀行のユーロマークの像は、街のランドマーク的存在であり、多くの観光客が訪れるスポットとなっています。

高層ビルが集まっているところのすぐ近くには、空高くそびえ立つ大聖堂があります。カトリック信者が祈りをささげる場所だそうです。バスの中から見ても、迫力を感じました。



ゲーテハウスやレーマーハウス(レーマー広場)も見学しました。旧市街の建物はドイツの本や写真で見るよりも壮大で、幻想的な光景はとても美しく、いつまでも眺めていたかったです。

一通り街を案内してもらった後、フランクフルト空港に到着しました。親切に案内をしていただいたバスの運転手さんやガイドさんとの別れも、とても名残惜しかったです。

帰りの飛行機では、とても不思議な気持ちになりました。住み慣れた日本に戻ることはもちろんうれしいのですが、帰りたくないという思いの方が強かったです。初日は緊張していて、時間が長く感じられましたが、ホストファミリーとの生活や様々なプログラムに、時間を忘れて夢中になりました。最終日を迎えたフランクフルトで振り返ってみると、あっという間の一週間でした。私達は、それぞれがドイツでつくった思い出をかみしめながら、日本へ向かう飛行機に乗り込みました。